

急かされるように呼びつけられて、わたしは身を震えさせながらまただ、と身構えた。財力を誇示するようにふんだんに金の装飾がなされた扉のドアノブをひねれば、わたしにひどく当たる夫の姿が見える。その隣で勝ち誇ったような笑みを浮かべる女が、自分がこの場所にいるのが正当だともいわんように堂々と立っていた。夫が口の端をいびつに持ち上げた。次に発される言葉をわたしは知っている。

「コレット、貴様を妻に迎えてもう三年経つが、いつそうに懷妊の兆しが見えないとはどういうことだ」

「……申し訳ございません」

そう責めたてる夫こそが夫婦の寝室にもいないのに子などができるわけないと反論したいのに、わたしはいつも謝ってしまう。

「子ができないのは正当な離縁の理由になるのはお前も知っているな。貴様の実家にも話は通した。この家から出て行ってもらおう」

「そうよね、勤めを果たせない方を置いてあげる理由はないもの」

弾んだ声の愛人はまるで王族のように着飾っていた。薄桃色のドレスをいろいろどるのは熟練の職人しか編めないとされている、おそろしく目の細やかなレース。それも何重にもかさなっている。あれだけで使用人が何人雇えるだろう。このままでは放蕩で家を滅ぼすと何度も警告したのに、やはりわたしの言葉が無意味だったことを実感して辛くなる。

「そうだコレット、早く出ていけ。もつとも、貴様に再度求婚する男など現れぬだろうから生涯実家か、修道院で過ごすことになるだろうがな」

「あら、あなただったら。さすがにそれはかわいそうよ」

二人の醜い笑い声が、大きく反響して頭が痛くなってくる。割れそうな痛みを訴えたところで、二人の姿が乱れて、途切れた。

「はっ、は、は——っ。また、この夢……」

どくどくといやな鼓動を刻む胸をおさえながら、深く息を吸う。はやく忘れてしまいたい記憶ほど、深く刻まれてしまうのはなぜだろう。問いかけても答えは出ない。喉がひどくかわいた気がして、慎重にベッドから起きあがろうとしたところ、かすれた男の声に止められた。

「コレット、どうしたんだい？」

「……あ、少し喉が渴いたから」

寝ぼけ眼をした現在の夫は、目を擦りながらベッドから身を起こす。整った顔に散らばる、少し長い前髪を寝ぼけながら払ってから身体を伸ばした。

「いいのよ、あなたまで起きなくって」

「うん、ボクもそろそろ起きようとおもってたんだ。メイドもそろそろ朝の仕事に取りかかっているはずだから、二人分お茶を入れてもらおう」

さっそくロレンスが呼び鈴を慣らす。部屋に來た使用人は笑顔で応じて、すぐに

勤めを果たしてくれた。前の家はいかなかった。彼は使用人に簡単な用事を頼むだけでも、なにか難癖を付けて怒鳴りちらしていた。

「コレット、どうぞ」

「あ、ありがとう」

ほこほこと湯気が立つ紅茶を受け取って、ゆっくりと飲む。ミルクと砂糖が入った、熱すぎない温度のそれは一度だけしか伝えていないわたしの好みびったりだった。

「それを飲んで身支度したら朝食にしようか。キミの好物を出すように伝えてあるから。昔からコレットはあんずのパイがすきだもんね」

につこりと微笑む夫にわたしは小さく頷く。わたしはいま、間違いなく幸せなはずだ。

それなのに、過去の傷がなかなか癒えてはくれなかった。

親同士に決められた最初の嫁ぎ先は、広大な領地をもつ古くから続く子爵家だった。宮廷にも代々役職を持っているから、娘の幸せを願った両親がいくつかの候補のなかから堅実な嫁ぎ先として選んでくれたのだ。

けれども、結婚生活は最初から暗雲が立ち込めた。式の当日にじろりといやな目で全身を値踏みするように眺めた元夫は、「肖像画と違う」と刺々しい言葉を浴びせてきたのだ。

「え」

「肖像画ではもっと肌が白かった」

義理の両親は自分たちの息子をたしなめてわたしに謝ってくれたが、さっそくわたしは彼とやっていく自信がなくなってしまったのだ。

そしてそのイヤな予感現実のものとなり、わたしは再び実家に戻ることになった。

夫に捨てられたことでなく、嫁ぎ先でうまくやれずに両親に申し訳なくて気落ちしているわたしに、ある日来客があった。父親同士の仲がよく、幼いころは共に遊んでいた幼馴染のロレンスだ。

彼は元夫にひどく憤慨しながらわたしを慰めてくれた。そしてその勢いのまま、元夫の宮廷での振舞も教えてくれた。わたしを突き放した男は、あろうことか自分たちの放蕩を自慢しながらわたしがいかに不出来な妻だったかを吹聴しているらしい。

「ひどい……、じゃあ宮廷の人たちに根も葉もないことを広めてるのね」

元夫の評判は芳しくないから、その噂をまるきり信じる人はいないだろうが、それでも噂の渦中の人間と好き好んで結婚しようとする男は現れないだろう。

「そうやって、わたしが他の人と結婚できないようにしたいのかしら。わたしがそんなに気に障ることをしてしまったの……？」

いろんな感情がないまぜになって、はらりと涙がこぼれる。

結婚式での顔合わせから、離婚するまで一度もいたわりの言葉を掛けてくれたことなんてなかった。遊び相手を屋敷に堂々と連れてきて、わたしより豪華な装飾品を着けているのも常だった。着飾らせた愛人とわたしを並び立たせて、これではどちらが女主人かわからないと嘲笑された。

夜の生活だって、一方的にあちらの欲望を押し付けるだけのもので一度も喜びを感じたことなんてなかった。それでも子ができれば変わるかもしれないとわずかな期待を抱いて耐えていたのに、一年もたてば夜遊びで不在がちになった。それなのに子どもができないのはお前のせいだと罵られてその理不尽さを無理やりのみこんだ。

やっと離れられたと思ったのに、また怯えないといけないのかと想像すると情けなくて涙が止まらなかった。ロレンスの前で、こんな顔見せたくないのに。

「すまないコレット、戻ってきたばかりのキミに聞かせる話じゃなかったね」

「っ、いいのっ、いずれ、知ることだもの……、でも、いよいよ修道院に行くのも考えないといけないかもしれないわね」

元夫は、どうせ三年励んでも子供がでなかったのはわたしのせいになっているのだろう。正当な手続きを踏んだから、離婚の責はわたしだけにあると言いふらしいに違いない。

それが真実かどうかなんて宮廷の人にはわからない。ただでさえ出戻った女に好き好んで求婚しようなんて人はいないから両親が必死に嫁ぎ先を探してくれても頷く家があるかどうかわからない。それに運よく再婚できたとしても、またあのよう辛い日々を過ごす羽目になるのかと思うと、身がすくみ上ってしまう。

「修道院？ふざけてる。だってコレットは何も悪くないんだろう？」

「ロレンス、気持ちはいれしいけど誰もがあなたみたいに考えてくれるわけじゃない



いわ」

「じゃあボクがキミと結婚するよ」

「……ロレンスが？」

わたしは目をぱちくりと開いた。宮廷の令嬢たちに熱っぽい視線を送られている未婚の貴公子と、出戻りのわたしが釣り合うなんて到底思えない。それにいくら父親同士の仲がいいとはいっても、息子の妻としてわたしを迎えるかはまた別の問題だ。それもロレンスもわかっていないはずだ。

きつとロレンスなりの精いっぱいなのなぐさめの気持ちで本気ではないのだろう。わたしはそう納得して、涙をぬぐう。

「そうね、そうならきつと素敵でしょうね」

深く考えずに、わたしはロレンスに微笑んだ。彼が本気だと知ったのは、それから一月ほどたってから、両親に大切な話があると呼び出された時だった。

ロレンスの家に嫁ぐと、思いのほかご両親も歓迎してくれた。ロレンスはやさしくて、使用人もわたしのことを敬ってくれる。

これ以上ないほど幸せなはずなのに、わたしだけが過去と同じ場所で足踏みしているのだ。

朝食を終えて、心を落ち着かせるために自室で刺繍していると、心なしか浮ついた様子のロレンスに見せたいものがあるんだと呼び出された。

「なに、どうしたの？」

「ふふ、まだ秘密だよ」

連れていかれた応接室には、商人が控えていてテーブルには煌びやかな生地が並んでいた。

「ロレンス、これ」

「結婚してからキミにドレスの一着も作ってあげてなかったろう？いくつか流行りの生地を持ってきたから一緒に選ぼう」

驚きながらいくつか商人が持ってきた生地を見ると、深い青色をした生地が目に入った。

「……素敵」

上品な光沢のあるサテン生地を眺めていれば、商人が感心したような声を出す。

「さすが奥様お目が高い。こちら熟練の職人が織ったものでしてね、ドレスに仕立てれば奥様の知的な美しさをさらに引き立てると思いますよ」

「ああ、ボクもその色がコレットに似合うと思う。こっちのレースも袖口につけるといいんじゃないか」

「ちょ、ちよつとロレンス」

商人がそろばんをはじいて見積もりを取ってくれるが、目にした瞬間に固まってしまう金額だった。

「どうですか旦那様、美しい奥様に」

「コレット、ほかにも気になるものはないかい？」

「ちょ、ちよつと待って、こんな高価なもの……、ちよつと考えさせて……」

うろたえるわたしにロレンスは困ったように笑う。

「そうか、あんまり急すぎたね。せっかくだ、他の生地も持つてきてもらつてから決めようか」

ロレンスがそう告げて、商人には日を改めてまた来てもらうことになった。二人で見送つたあとに、夫婦の部屋へ戻つた。椅子で脱力しているわたしに、ロレンスが眉を寄せながら顔を覗き込んでくる。

「すまない、コレットが喜ばせたかつたんだ。嫁いできてくれてから、どこか無理をして笑っているみたいだったから」

「ロレンス、気づいてたの」

「そりゃあ、好きな人のことだ。気づかないわけないだろう」

「え」

わたしは思わず間拔けな声を出して固まってしまう。

「なんだ、小さいころは大きくなつたら結婚しようつて言つてたじゃないか」

「それ、は、小さなころの約束だからもう忘れてるのかと思ってたわ」

「そんなわけないだろう、じゃあなんでボクがキミと結婚したと思ったの？」

「あなたって、優しいけれど曲がったことが嫌いでしょう？だからわたしがひどい扱いを受けて怒ったのだと思って、正義感や同情心で、わたしを受け入れてくれたのだから……」

目を反らしながら搾り出すように告げれば、ロレンスがひどいなと笑う。

「……コレットは、結婚してくれるならだれでもよかった？」

「そ、んなことないわ。わたしも、本当はあなたのことが好きだったもの。でも、わたし、あなたに好きになってもらえるような娘だと思えないの。さっきも、綺麗なドレスに袖を通すのがわたしだと思ったら、素直に喜ばなくて……」

「そんなことないよ」

情けない泣き言をいっても、ロレンスは穏やかに話を聞いてくれる。そしてぽつ

りと小さな声でなにか呟いた。

「……あいつがそんな風に、キミを変えたのかい？　許せないな」

小さすぎて聞き取れなくて問い返そうとしたら、頬を骨ばった手がするりと撫でた。

「あ」

「キミに手を出さなかったのは、すぐに手を出したら子どもを早く作れってキミを追いつめるみたいでいやだったから。だから、我慢してたんだ。本当は触れたくてしかたなかったよ」

「……ほんとうに？　で、でもなんで」

「コレットはやさしくてかわいい女の子だから。もう泣かせたくないんだ。でもコレットがいやじゃなければ、キミを抱きたい」

指先の熱から、ロレンスが本気だということが伝わってくる。わたしは頬を染めて、こくんと小さく頷いた。

「ありがとう。夜が楽しみだよ」

すっかりいますぐにでも彼のものにされるのだと思っていたら、ちゃんと一日が終わるまで待ってくれるらしい。心の準備ができるから安心したような、でも少しがっかりしたような複雑な気持ちになる。

「あれ、もしかしてコレットはすぐにベッドに入りたかった？ 積極的だね」

「も、もう！」

ロレンスのからかいに顔を上げれば、にっこりと笑う。

「はは、少しは元気になってきたみたいだね」

たしかに感情を抑えずに声を出したのは久しぶりだった。自分が声の出し方さえ忘れていたことに驚く。そして実家で過ごしたままだったとしたら、自分が忘れたものにすら気が付かなかったかもしれない。

「……わたし、ロレンスと結婚出来てよかったわ。結婚してくれて、ありがとう」



骨ばった手を握りながら笑えば、ロレンスが一瞬固まってわたしの顔を見つめる。おもむろに整った顔が近づいてきて、受け入れるようにぎゅっと目を閉じる。唇にふに、としたやわらかい感覚が触れて、それだけなのにドギマギしていると唇の隙間を少しザラついたやわらかいものが舐め上げた。少しだけ結んでいた唇をほころばせれば、にゆるりと舌が入ってくる。縮こまっているわたしの舌をすりすり♡と撫でられたら、少しザラザラとした感覚が伝わってきてじわりとカラダの温度があがっていく♡

「あ♡ロレンス♡」

「ごめん、やっぱり夜まで待てないや。すぐベッドいつでもいいかな？」

まだ日の高いうちからそんなことをするなんてという抵抗感が頭をかすめたが、うずうずと浮かれるカラダがそれをかき消していく。元夫に触れられても身体は冷たく強張るだけだったのに、ロレンスに触れられるとこんな気持ちになるなんて。

「わ、わたしも、ロレンスに抱きしめてもらったら辛かったこと、忘れられる気がするの……」

ドキドキしながらそう告げると、わたしのことを愛している夫は反則だ、と呟いてからわたしのことを抱き上げた。

「きゃあ」

ひょいっと持ち上げられて、カラダが宙に浮く。わたしを軽々お姫様抱っこするロレンスに、目の前にいるのは小さいころ遊んでいた少年じゃなくて大人の男性なのだと改めて実感してしまった。

「まったく、コレットはそんなにボクを煽ってどうするつもりだい？もちろん、たくさんたくさん愛して、ぜーんぶ忘れさせてあげる♡」

ベッドに身体を横たえさせられると、上着を椅子に乱雑に掛けたロレンスがしゅるりと首元を緩める。そのままシャツを脱ぐと、腹筋にくつきりとした陰影が浮き

上がった。均整のとれた筋肉質な身体を思わず凝視してしまう。

「どうしたの？ちゃんとコレットのお眼鏡にかなったかな？」

「え、ええ。ロレンスって着やせしてみえるのね」

「コレットのカラダも見せて♡」

骨ばった長い指が、あつという間にドレスの留め具を外していく。そのまま幾重にも重なったドレスを器用に脱がされれば、ネグリジェとショーツ、ガータベルトだけという心もとない姿にされる。

すべて忘れようとしたのに、あの男に浴びせられた言葉がまた脳裏にのみがえってくる。欲情しないカラダだの、オレを責めるような目で見るなだの、お前なんかじゃ愉しめないだの、好き勝手な言葉だ。刺さったままの小さな棘が、まだ抜けない。

「あ、あんまり、みないで……」

今日の前にいるのはやさしいロレンスなのに、思わず拒んでしまう。

「どうして？きれいなカラダなのに」

「だ、だって……」

「またこわくなっちゃった？」

やさしい問いかけにこくりと頷くとロレンスは怒ることなく、頬にキスを落とす。

「じゃあ下着の上からなら触ってもいいかい？」

それくらいなら、と頷けば大きな手が腰をやさしく撫で上げる。

「んっ」

「うんとやさしくするつもりだけど、怖くなったらすぐにいってね」

ロレンスの言葉に、どうしてわたしはずっと傷ついたままにいるんだろうと情けなくなる。目を伏せたまま思わず考え込んでいると、大きな手がむにゅり♡と胸を寄せるようにして優しく揉みしだいた。

「あ♡」

「こら、コレット。また余計な事考えてたでしょう。自分を責めすぎるのは、キミの悪い癖だね。ね、ちゃんとかボクのことだけ見て」

むにゅむにゅ♡とやさしく胸を揉まれながら、ゆっくりとキスされる。伝わる熱に自責が少しぼやけたところに、すりゅ♡とやさしく乳房の先端を指の腹が掠めた。  
「ぶ♡」

思わず声を上げると、そこが好きだと思われたのかロレンスが立ち上がり始めた乳首を優しく上下に抜きあげる。背筋がぞわりと粟立って、ぞわぞわとする。でも決して不快ではない。

「コレット、きもちいい？」

「わ、わからないわ、だって、こんなにやさしく触られたことなんてないものっ」  
掛けられる言葉も、触り方の手つきも、じんわりあたたかくなる胸もまるで違う。

機嫌を損なわないように常に気を張っている必要なんてないセックスなんてはじめてだ。

薄い布越しに胸に沈む指をじいつ♡と見てしまう♡触られてうれしいと感じている自分がいる♡

おっぱいをやさしく揉みしだくロレンスの手に自分の手を重ねてしまう。

「あ」

「うん？どうかしたかい？」

ほとんど無意識にやってしまった行動が恥ずかしい。けれど、ちゃんと理由を説明できないと怖いと思っているのかと勘違いされて触るのをやめられてしまうかもしれない。

「ち、ちがうの、こわいとかじゃなくて。その、ロレンスに触れたかっただけなの」「そっか♡かわいいね♡コレット」

ちゅっ♡と額にキスを落とされてから、指の腹がゆっくりと勃起あがりかけている乳首のさきっぱをなぞる。乳頭の窪みを指の腹でずーっとスリスリ♡と擦られて思わず腰がゆらめいた♡

「あ♡」

いままで感じたことがなくてもわかる。これ、きもちいい♡すきな人に優しくさわってもらうとこんなに気持ちいいなんて♡

「コレット、乳首気持ちいい？」

一瞬のためらいのあとに、コクコクと小さく首を縦に振る。ロレンスが安心したように小さく息を吐いた。

「よかった♡じゃあたくさん触るね♡」

下着の薄い生地越しに、触られてっん♡と尖った乳首の側面を指がゆっくりとなぞっていく♡こうすると、乳首の大きさをたしかめられているみたいで恥ずかしい。

なのに乳首は布越しでもわかるくらいにまたぷく♡と大きくなる♡

「かわいいね♡またおっきくなった♡ボクの指で触ったらその分大きくなってく  
れて、かわいいね♡」

「あう♡わ、わたし♡自分が乳首弱いなんてっ♡しらなかった♡こんなにきもちい  
いのっ♡しらなかったのに♡」

少し言い訳じみた台詞をいえば、ロレンスが喉を上下させる。

「かわいいおねだりだね♡二人でもっとたくさん、気持ちいいこと探していこ  
う?」

ロレンスがわたしの耳に唇を寄せて、低くあまい声で囁く。布ごと乳首にひっか  
けるように擦られると、やさしい刺激でいじられて敏感になった乳首がぴくっ♡と  
震えた。

「あ♡あ♡あ♡」



思わず声を抑えようとすると「きかせてくれないのかい？」と眉を垂れさせて尋ねてくる。そんな顔をされれば声を抑えられなくなってしまふ。

「っ♡も、もう、変な声だなんていわないでよ……？」

「いうわけないだろう？こんなにかわいい声」

「ひあ♡」

きゅう♡と軽く両方の乳首を軽く摘まれてぐにぐに♡とやさしく押し潰される♡乳首の先端から頭にじわりとあまいしびれが伝わって、びくん♡と腰が跳ねる♡

「ん♡ロレンス♡」

あまえるような声で名前を呼んでしまう自分に驚いていると、ロレンスがやさしく微笑みながら、糸をこるように赤く尖った突起をねじる♡

「コレット、乳首きもちいい？」

「ん♡きもちいい♡あなたにさわられるの♡すき♡」

素直に漏らした自分に驚くけれど、素直に口にしたらまた肌が汗ばんだ気がする♡まだおっぱい触られてるだけなのに、こんなにもきもちよくされてどうすればいいかわからない♡

「そっか♡じゃあこれは？」

ツルツルとした生地ごしの乳首に、ロレンスがちょん♡と爪を立てる。そのまま軽く引っかかれれば、おなかの奥がきゅん♡と痺れた♡

「あ♡」

「こうされるのはきらい？」

カリカリ♡と先っぽをずっとやさしく引っかかれて触れてないのに秘裂がぬかるんでいく♡前の嫁ぎ先ではまったく濡れなくて、それも不興を買う原因のひとつだったのに。信じられない♡

「~~~~っ♡す、すきっ♡それ♡ロレンスにつ♡ちくびカリカリされるのっ♡すきい♡」

「そっか♡じゃあたくさんカリカリしてあげるね♡」

恥ずかしいけれど素直に伝えれば、ぐにゅ♡と乳頭に爪を食い込ませて一定のリズムでやさしくほじられ続ける♡カリカリ♡かりゅかりゅ♡

乳頭のへこんでるところ触れられると、おなかのおくも切なくなる♡じわじわ♡と熱が高まって、うずまいて♡へんな感じ♡

「ロレンス♡」

「うん？」

名前を呼べば、穏やかに首をかしげながらロレンスが答えてくれた。たったそれだけなのに目の前の笑顔がいとおしくてたまらなくなる♡  
気づけば自分から腕を背中に絡ませて唇を突き出していた。

「キス♡キスして♡おっぱいかわいがりながらちゅーしてほしいの♡」

「ふふ♡かわいいね♡コレット♡もちろんだよ♡」

赤い舌がぺろりと唇を撫でると、ためらいもせずに迎え入れる。そのままぐちゅぐちゅ♡とお互いの舌の擦り付け合えば、じんわり♡とどちらのものともわからない唾液が染み出してきた♡

「ん♡ふう♡」

すきな人とするキス、こんなに気持ちよかったんだ♡しらなかった♡

うっとり目を細めたところで、爪が乳首の先っぽに深く食い込む♡布に阻まれるせいか、やさしく指先を動かされているせいか痛くない♡小刻みに引っかかる乳首がじんじん♡と疼いて♡一定のリズムで弄られるたびにそのじんじんと甘い疼きがだんだん大きくなっていく♡

「ん♡んちゅっ♡んぐっ♡っ♡」

舌を甘く吸われると、ともに喘ぎ声を上げられない♡おっぱいきもちいい♡つて情けない声を上げられないからか、どんどん乳首の痺れが大きくなっていく♡カリカリ♡かりゅ♡きゅうう♡

「っ♡んんんっ♡」

爪でたくさんやさしくいじられてぼってりした乳首を、突然指の腹が押しつぶす♡散々ぼってり腫れた乳首を押しつぶされて、おなかの奥できもちいいのがはじけた♡

「~~~~っ♡んんん~~~~っ♡んん♡」

訳も分からないままビクビク♡と腰を跳ねさせていると、ちゅぱっ♡と粘っこい水音を響かせてから唇が離れていく♡

「んあ♡ロレンス♡」

「かわいい♡乳首でイっちゃったのかい？」

「え？」

ビクビク♡とまだゆるゆると動く腰に、ふわっ♡とあまい脱力感が広がるカラダ。これがイク♡ってことなのかと指摘されてようやく気が付いた。

「……わたし、不感症のはずなのに」

「それ、あいつに言われたの？おかしなこというね。こんなにかわいくて感じやすいのに」

いったばかりの敏感な乳首を指の腹でゆっくりとつまんでこねられる♡

「あ♡」

思わず濁った声を出してしまうと、尖ったそこを軽くピン♡と指先で弾かれた♡

「うう♡」

「かわいいね♡コレットのかわいい声聞けてうれしい♡」

「も、もう♡」

まだはじまっただばかりなのに、ずつとかわいいとすきを伝えられて頭が沸騰しそうだ。乳首をきゆう♡とキャミソールごとつままれながら、もう片方の手が腰を撫でさすりながら徐々に下へ滑っていく。

太ももを少し汗ばんだ手のひらで撫でさされると、ロレンスもわたしに興奮しているのかと感じてうれしくなる。ぴったりと閉じていた足の力を抜いて頷けば骨ばった指が内腿をなぞった。

「あ♡」

「コレットのふともも、すべすべできもちいいよ♡」

皮膚の薄い部分をゆっくりと撫で上げられて、ひくひく♡と秘裂が震えてしまう♡とろっ♡と愛液が滴るのを感じて、腰を揺らめかせるとふいに手の甲が布越しにちゅん♡と肉豆に触れた♡

「~~~~っ♡」

もじもじと腰を揺らめかせて、ロレンスを上目遣いで見つめてしまう。

「ふふ、こっちも触ってもいい？」

こくりと頷けばショーツ越しに肉土手をふにふにと揉まれる。

「ふふ、ここ膨らんでる♡期待してくれてるんだね♡」

ショーツから少しはみ出したそこをうれしそうにロレンスがなぞる。骨ばった指が割れ目をするりと撫で上げて、くちゅり♡と粘ついた水音がした。

「あ♡」

「濡れてるね♡かわいいおマンコだ♡」

秘裂をなぞられているだけなのに、背中がぞくぞく♡と粟立ってこぶり♡と愛液が流れてしまう♡ぷくっ♡と膨らんだクリトリスがショーツをわずかに押し上げて触ってほしそうにしてる♡おマンコ、触られたくて熱くなっちゃってる♡自分でもショーツのなかが蒸れてるのわかつちゃう♡



「あう♡」

「ごめんね♡焦らしちゃったね♡」

ぐに♡とショーツを履いたまま肉土手をぐに♡と拡げられて、布地がぴったりとおマンコに張り付いてしまう♡ぬがさないで、っていったけどこれだとおマンコの形も、ぽちっ♡って膨らんでる肉豆の形もはっきりわかつちゃう♡

はずかしい♡でもはずかしいけどイヤじゃない♡ここで本気でいやがればロレンスはきつとやめてくれる。でも、どうしよう♡

わたしが恥ずかしがって迷っている間にロレンスがくちゅくちゅ♡と濡れたクロッチ部分を指でなぞり始める♡

「ん♡」

「かわいいねコレット♡クロッチのところヌルヌルだ♡ほら、ショーツから染み出してボクの指濡らしているよ♡」

ロレンスが指を擦り合わせてから離して、ねばあ♡と糸を引いた愛液を見せつけてくる♡

「もーっとかーわいいおマンコ♡トロトロにしてあげるね♡」

濡れた布が張り付いたクリトリスの裏筋をすりすり♡なぞられると、じわ♡とまた愛液がショーツにしみ込む感覚がした♡ぐちゃぐちゃのショーツが張り付いた肉豆は、摩擦がないせいか敏感に指の感覚を拾ってしまう♡